

メンタルヘルス問題のある母親への支援

—A C Tによるチーム支援—

白 石 裕 香*・住 友 雄 資**

要旨 本研究は、多職種チームによる訪問型支援をおこなっているA C Tを取り上げ、メンタルヘルス問題のある母親への支援の実態とその支援内容を明らかにすることを目的としている。そのためにA C Tスタッフ3名に半構造化面接によるインタビュー調査を実施し、そこで得られたデータを「うえの式質的分析法」の一部を用いて分析した。その結果、A C Tが母親のストレスの軽減、経済的問題の解決、孤立の解消などの支援によって虐待防止につなげていること、これらのチーム支援にA C Tの特徴が生かされているということ等がわかる14のカテゴリーが生成され、A C Tによるメンタルヘルス問題のある母親の支援が有効であることがわかった。なおインタビューで得られた事例はすべて症状が安定して就労を希望している母親の事例であったため、就労を望まない等の母親への支援については検討できていないこと等、今後の研究課題が提示された。

キーワード メンタルヘルス問題のある母親 A C T チーム支援 うえの式質的分析法

1 問題の所在

吉田ら（2008）の研究において、メンタルヘルス問題のある親による虐待事例は児童虐待の3～7割を占める。松宮ら（2010）による児童福祉施設を対象とした質問紙調査でも、児童福祉施設に入所する児童の49.1%は被虐待児童であり、被虐待児童の46.1%はメンタルヘルス問題のある親による虐待を受けていたことが明らかとなった。

これらから、メンタルヘルス問題を抱える親と児童虐待の問題は密接に関連しているといえる。

しかし、メンタルヘルス問題のある親への支援は、「当該事例の特性に応じた支援方策について十分に議論されているとはいえない」という現状であり、子ども虐待は精神保健福祉課題でもあることを認識し、研修体制の拡充や適切な人員配置により、多職種間の連携の促進、認

* 広島県同胞援護財団・介護職員

** 福岡県立大学人間社会学部・教授

識の共有をすることで、支援環境の整備を図る必要性があると指摘している（松宮 2013）。

松宮（2016）は、3つの先駆的支援活動例への調査から以下のことを明らかにした。

①精神保健福祉士が配置されている児童福祉施設へのヒアリング調査

児童福祉施設・児童相談所などへの精神保健福祉士の配置促進は、そこでのソーシャルワーク機能の発揮および精神保健医療福祉との連携促進に寄与する可能性がある。

②包括型地域生活支援プログラム（ACT）を対象としたヒアリング調査および事例調査

発達期の子ども養育世帯への支援においてもアウトリーチ支援が有用に機能していることが把握でき、ACTやこれに類似する支援システムの普及は、子ども虐待防止にも有用である可能性がある。

③市町村に設置される要保護児童対策地域協議会へのヒアリング調査

要保護児童対策地域協議会で取り上げる事例の30～80%の親にメンタルヘルス問題がみられる。その一方で精神保健福祉士や精神科医の参画は乏しく、参画がある場合は有効に機能している。

一般的に精神保健福祉士によるメンタルヘルス問題のある親への支援は活発とはいえないが、参画がある場合は有効に機能し得ることが指摘されている。とりわけ、24時間体制で365日、保健・医療・福祉等のサービスを訪問によって提供するACTは、精神保健福祉士を含む精神保健医療福祉の専門職がチームとしてかわることから、メンタルヘルス問題のみならずそこに垣間見える生活問題を把握し、家族関係などへも直接的な支援を展開しやすい。ま

た、ストレングス視点を基盤とした「世帯ぐるみ」の支援は、親のみならず子どもへのケア、子育てスキルの向上、生活基盤づくり、親の就労にまで及び、親の安定をはじめ、子どもの成長と虐待防止に大きな機能を発揮し得ることを示している。

しかし、ACTによるメンタルヘルス問題のある親への支援に焦点化した先行研究は松宮（2016）のみであり、その実態とチーム支援に関する議論は乏しい。そこで本事例研究では、一般的に母親による子育てが多いことから、メンタルヘルス問題のある母親へのACTによるチーム支援に焦点をあてた。なお、本論中のメンタルヘルス問題とは、精神障害をもつ人のみならず、ストレスや疲労、悩み等によって、心の健康を失っている状態を指す。

2 目的と方法

本研究の目的は、ACTによるメンタルヘルス問題のある母親への支援内容を明らかにすることである。そのために、メンタルヘルス問題のある母親への支援を行っているACTスタッフ（以下、スタッフ）に対してインタビュー調査¹⁾を実施し、そこで得られたデータを「うえの式質的分析法」²⁾の一部を用いて分析した。またスタッフおよび事例本人の概要を表に示す。

3 結果

分析結果として次の14のカテゴリーが生成された（以下、カテゴリーは《 》で、ユニットは“ ”で示し、太字とする。また、調査協力が語った言葉は「 」でくくり9ポイント

表 A C Tスタッフおよび事例本人の概要

研究協力者番号		①	②	③
スタッフ	職種	作業療法士	作業療法士・精神保健福祉士	精神保健福祉士
	経験年数	5年4か月	9年4か月	2年4か月
事例本人の概要	母親の診断名	統合失調感情障害	双極性障害	統合失調症
	母親の年齢	40代	40代	40代
	子どもの年齢	10、12、15、19、21、24歳	15、17、18歳	15歳

トで表記し、調査協力者番号を文末に記した)。

A C Tチームが行うメンタルヘルス問題のある母親への支援について、14個のカテゴリーを用いて説明したストーリーラインは、次の通りである。

メンタルヘルス問題のある母親へのA C Tによる支援は、母親の就労をも視野に入れて、子育てを含めた日常生活を支えている。

メンタルヘルス問題のある親のなかには《母親自身の生活歴が子育てに影響を及ぼしている》場合があり、そのためスタッフは《虐待が起こる可能性を視野に入れておく》必要がある。実際の子育てのなかで《母親がストレスを感じる》ことが多くある。そこでA C Tは《母親のストレスを軽減するための支援をする》。具体的には《母親が精神的に不安にならないよう経済的問題を軽減する》、《母親が他者を頼り、負担軽減できるようになる》、《母親が症状のセルフコントロールできるようにする》、《孤立を解消するために働きかける》といった支援である。それらの支援が展開されていくなかで、《子どもの成長によって母親のストレスが軽減していく》という過程を経る。

A C Tによるチーム支援に着目すると、《はじめは上手くいかなかったが、チームとしてのA C Tが徐々にわかってくる》、《関係性を

構築することでスムーズな支援が行えるようになる》、《A C Tチームの特徴を生かした支援を考える》ことが明らかになった。これらから、メンタルヘルス問題のある母親が《地域での生活を継続するためにA C Tが機能する》こととなり、《就労に向けてステップアップしていくことで、母親の生活能力が高まりA C T卒業が見えてくる》ことがある。

また、ストーリーラインを図で記した(別紙図「メンタルヘルス問題のある母親へのA C Tによる支援」)。このストーリーラインの順に沿って、それぞれのカテゴリーを説明する。

3-1 母親自身の生活歴が子育てに影響を及ぼしている

メンタルヘルス問題のある母親のなかには、自身が機能不全家族で育ち、大人になってもなお過去の辛い経験を抱えているという、いわゆるアダルトチルドレンの母親がいる。それゆえ自分自身を卑下するところがあり、過去の辛い経験を軽減・荷下ろしをすることで母親として成長していくことがある。

このカテゴリーに含まれる、それぞれのユニットについて説明していくなかで、《母親自身の生活歴が子育てに影響を及ぼしている》について述べる(このカテゴリーとユニットの説明の仕方は同様なので、以下省略する)。

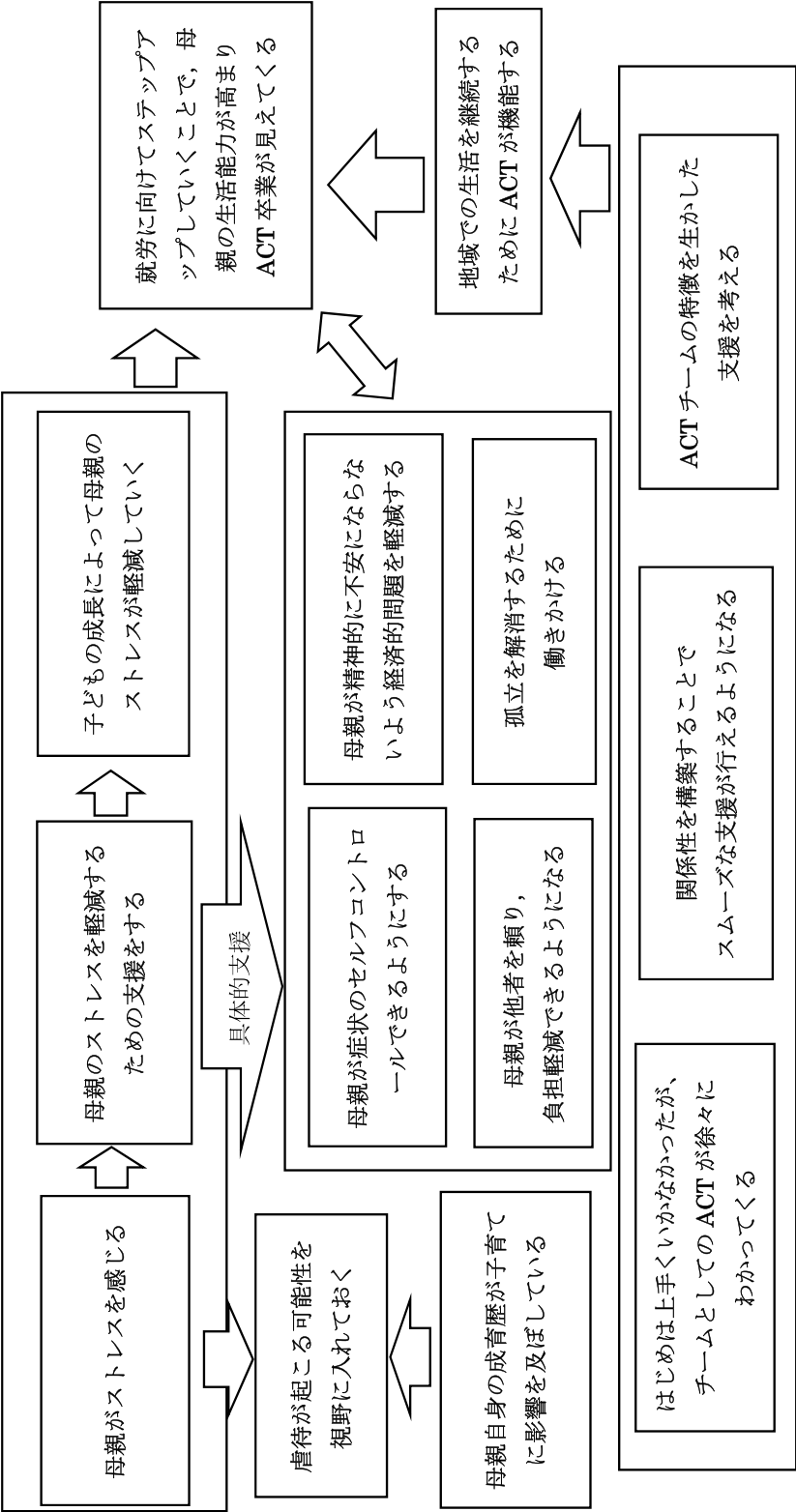


図 メンタルヘルス問題のある母親へのACTによる支援(筆者作成)

- i. 母親が自分の生活歴と重ねてしまっている

“母親が自分の生活歴と重ねてしまっている”

とは、母親が子育てに自分自身の生活歴を重ねてしまっていることである。機能不全家族で育ったことから、親としての子どもへの向き合い方を教えられておらず、子育ての方法がわからないという状況がある。

「そこ（セルフコントロール）にいく過程として成育歴のところで自分を大切にしない、自分が大切に育てられてきていないというのがあって (②)」(※ () 内は執筆者による注記/以下、同様)

- ii. 母親自身が軽んじるところがある

“母親自身が軽んじるところがある”とは、

母親自身が大切に育てられていないという生活歴から、自分自身を大切にしない傾向があるということである。

「例えば眠らなくていいとか、ごはん食べなくても別に良いとか (②)」

- iii. 母親が過去の辛い経験を軽減していく

“母親が過去の辛い経験を軽減していく”とは、

母親が過去の辛い経験を軽減できるように働きかけることである。スタッフや主治医が本人と向き合い、話をしていく過程で過去の経験を消化していくことが必要である。

「自分が幼少期に受けてきたことであったりということやパンドラの箱のような感じでずっと箱の中に閉じ込めてしまっている。そこをひも解いていかないと難しい。主治医の先生と本人と向き合いながら話をしている (②)」

- iv. 荷下ろしをしながら親としての行いを学ぶ

“荷下ろしをしながら親としての行いを学ぶ”

とは、母親が過去の辛い経験を軽減していく過程で子どもへの対応を学んでいくことである。

「自分がされてきたことの振り返り、棚卸しというところをしながらサポートを行いながら子どもたちのために動くことを学ぶ (②)」

3-2 虐待が起こる可能性を視野に入れておく

現在虐待が起こっていないくとも《虐待が起こる可能性を視野に入れておく》必要があり、特に母親の症状が悪くなったときを見据えた対応を考えている。

- i. 児童相談所との連携を視野に入れている

“児童相談所との連携を視野に入れている”

とは、スタッフがいつでも児童相談所と連携できるようにしているということである。

「児童相談所の職員と連携できるようなかたちではと考えている (①)」

- ii. 症状が悪くなったとき注意しておく

“症状が悪くなったとき注意しておく”とは、

母親の症状が悪くなったときに虐待が起こってしまわないよう注意しておくことである。

「病状悪くなったときにまだ関わっていないのでどのように出るかわからない (③)」

- iii. お守りにショートステイを申請している

家族が家庭で生活することが困難になった

場合にショートステイを利用できるよう“お守りにショートステイを申請している”ことである。

「お守りにショートステイとかの申請をしている（中略）実際一回も使ったことない（①）」

3-3 母親がストレスを感じる

子どもの学校の問題などによって《母親がストレスを感じる》ことが多くある。そのストレスによって子どもにきつくあたってしまうといったことが起きてしまう。

i. ストレスがかかる

“ストレスがかかる”とは、子育てをするうえでどうしてもストレスが多くかかってくるということである。

「一番下が男の子なのでものすごく元気がよくてお子さんの相手をするのはお母さんとしても大変、一時期それで調子を崩しそうになった、ストレスフルになった（①）」

ii. 子どもの不登校によって母親がストレスを感じてしまう

“子どもの不登校によって母親がストレスを感じてしまう”とは、子どもたちが不登校になることで母親の負担が大きくなり、ストレスがかかってしまうということである。

「お子さんとか不登校の時期も下3人はある。（中略）不登校になってお母さんに子どもたちがしがみついてずっと四六時中一緒、ということでのストレスとか（①）」

iii. 子どもにきつくあたってしまう

“子どもにきつくあたってしまう”とは、母親が自身のストレスを上手く処理できず、子どもにあたってしまうということである。

「そんなときに虐待まではいかないんですけど、子どもたちに感情的な言葉を浴びせてしまったりする（①）」

3-4 母親のストレスを軽減するための支援をする

母親がストレスを感じ、虐待につながってしまう可能性もある。したがって《母親のストレスを軽減するための支援をする》とは、虐待の防止のためにもスタッフが母親と相談をすること、子どもたちと一緒に遊んで母親がゆっくりできる時間をつくることを通して、母親がストレスを軽減できるようになるということである。

i. お子さんと離れる時間をつくるために訪問時に子どもたちと一緒に遊ぶ

“お子さんと離れる時間をつくるために訪問時に子どもたちと一緒に遊ぶ”とは、スタッフが子どもたちと一緒に遊び、母親がのんびりできる時間をつくるということである。子どもと母親それぞれに働きかけるうえで有効である。四六時中子どもと一緒にいることでの母親の負担を軽減することができる。

「お子さんと離れる時間を訪問のときにつくるために私が一番下の男の子と公園でおもいっきり野球をするような。（中略）お母さんにはゆっくり休んでもらってほんの1時間ですけど1人の時間をもってもらったり僕はそんな支援をしている（①）」

ii. 話を通じてサポートしていく

“話を通じてサポートしていく”とは、訪問時に母親との話を通じて支援をしていくことである。母親は自身の症状や子育て、生活面で様々な悩みを抱えることがある。子育てのことであれば同じように子育て経験のあるスタッフとじっくり話をすることで、母親の不安な気持ちを軽減することができる。

「他に女性の看護師が関わっている。(中略) 割と年代に近い面もあって、じっくり母としてのお母さんという立場同士でのサポートできるためのお話の支援(①)」

iii. ストレスが解消できるように支援する

“ストレスが解消できるように支援する”とは、母親がストレスを溜め込んでしまわないよう解消していくことである。母親のストレスを吐き出してもらえよう、常にアンテナを張って関わっている。

「お話を通じて少しでも吐き出してもらいながらちょっとでも解決策とかストレス解消ができたなら(①)」

3-5 母親が精神的に不安にならないよう経済的問題を軽減する

《母親が精神的に不安にならないよう経済的問題を軽減する》とは、経済的問題が母親の精神的な不安につながりやすいため、スタッフがお金に関する手続きや引っ越し等の相談に乗り、一緒に見通しを立てることで母親の不安を軽減するということである。

i. 経済的問題が精神的な不安に直結しやすい

い

“経済的問題が精神的な不安に直結しやすい”

とは、経済的な問題が母親の精神的不安につながりやすいということである。子どもが学校に通っているため春には臨時の出費が多くなる。このようなことが母親の精神的不安につながるのである。

「今年の春ぐっとうつになった。(中略) 経済的な問題も少し関係している(①)」

ii. 奨学金の申請方法、入学金・借り入れ手続きや引っ越しに関する相談をする

“奨学金の申請方法、入学金・借り入れ手続きや引っ越しに関する相談をする”とは、子どもの進学のために必要な手続き関係をスタッフがサポートすることである。母親はこのような手続きは難しいことがある。そこでスタッフが関わることで母親の不安を軽減することができる。

「上の子たちは今高校生なので高校に上がるための奨学金の取り方や引っ越しに関するものとか具体的なお話(②)」

iii. スタッフが一緒に見通しを立てて不安を軽減する

“スタッフと一緒に見通しを立てて不安を軽減する”とは、スタッフが母親と一緒に経済面の見通しを立てることで母親の先の不安を軽減するということである。

「入学金とか借り入れ手続きがわからない。(中略) そこで生活面、経済的な部分を精神保健福祉士の職員が役割として一緒に見通しを立てて不安を軽減してタイ

ムリーにタイミングを逃さずできたかな (①)」

3-6 母親が他者を頼り、負担軽減できるようになる

《母親が他者を頼り、負担軽減できるようになる》とは、母親が子育てについて周りに頼ることができず、負担になっていたが、自らヘルプを出し他者を頼ることで負担軽減できるようになるということである。

i. 周りに頼ることができず、抱え込んでしまい負担になっていた

“周りに頼ることができず、抱え込んでしまい負担になっていた”とは、母親が周りに自分から頼ることができず、負担になってしまっていたということである。

「子育てのことでお母さんに手伝ってほしいんだけど、というところがあっても今までの癖というか、抱え込んでしまうことがあって言いづらいという感じだった (③)」

ii. 自分でヘルプを出せるようになってきた
“自分でヘルプを出せるようになってきた”とは、母親が周りの人に頼ることができるようになってきたということである。このように周りを頼ることで母親自身の負担軽減につながる。スタッフはそれを促すよう、母親への声かけを行っていた。

「言ったほうが〇〇さんの負担が少なくなるし、体調を保つということになりませんか、みたいな話をするとヘルプを出せるようになった (③)」

3-7 母親が症状のセルフコントロールできるようにする

《母親が症状のセルフコントロールできるようにする》とは、母親が躁うつによって気分の変化があるため、スタッフが母親へ声かけを行い、SSTやWRAPの提案、体調が崩れたときの対処方法を身につける支援を行い、母親が症状のセルフコントロールできるようになることである。

i. 躁うつで気分の上がり下がりがある

“躁うつで気分の上がり下がりがある”とは、躁とうつという気分の変化によって母親の生活のしづらさが起きてしまうことがある。

「気分が上がる時も下がる時もある。(中略) 最近ほとんど波が一定になってきてる(中略) 上がるときに結構色んなお買い物をしちゃうよねというのがこの人のサインでもある (②)」

ii. セルフコントロールに気付きを持てるような声かけを行う

“セルフコントロールに気付きを持てるような声かけを行う”とは、母親の症状がどのような状況でどのように生活に影響しているのか、気付きを得られるような声かけを行うことである。

「あがっているときは今あがってますよ、(中略) どころへんまでが自身の気付きですかというようなセルフコントロールに気付きをもっていたいただけるような声かけの支援を行っている (①)」

iii. SST、WRAPで自分の病気について知っていく必要があるという提案をする

“SST、WRAPで自分の病気について知っていく必要があるという提案をする”とは、母親の障害知識や回復するための対処法を身につけるために、SST（社会生活技能訓練）やりカバリープログラムの一つであるWRAP（元気回復行動プラン）への参加を提案することである。

「生活訓練でSSTとかWRAPとかで自分の病気を知っていく。（中略）回復できるために何が必要なのかを知っていくことをした方が良いんじゃないのかなというところを今話をしている（③）」

iv. 体調が崩れたときの対処方法を身に付ける

“体調が崩れたときの対処方法を身に付ける”とは、体調を崩したときに自身で対処できる力を身に付けるということである。この対処能力は職業準備性としても重要であり、スタッフは母親が自分で対処できることを目標に支援を行っている。

「仕事に向けてってところで今課題になっているのが、病識というより病感みたいなものあって、聞こえてくるのが幻聴だというのは分かっているんですけど、どういうときにいつ幻聴が聞こえてきて、どういうことを注意しないといけないのか、気を付けなといけないのがあんまり分からないような節があるので自分の病気についてのそういう部分を理解して知っていきながら、体調が崩れたときにどういう工夫が必要なのかとか、そういうのが考えられるようになるろう（③）」

3-8 孤立を解消するために働きかける

《孤立を解消するために働きかける》とは、他者との交流が少ないことから、孤立しないように支援を行うということである。

i. 交流が少ない

“交流が少ない”とは、母親が家族以外の人との交流が少ないということである。

「元々は母子寮なので色んな人に囲まれて過ごしてきた。（中略）現在は利用できる条件があるので、独立されて一般の住宅にお住まい（中略）周りには専門的なサポートをしてくれる方がいない（②）」

ii. セルフヘルプグループへの参加を提案する

“セルフヘルプグループへの参加を提案する”とは、母親が症状の対処能力を身に付けられるよう、同じ障害を持った仲間との関わりを持つことを提案することである。

「同じような病気を持った人の集まりの中でどのように克服したらいいとか気付きを得られる仲間を増やしていくような提案をしていきたいいな（③）」

3-9 子どもの成長によって母親のストレスが軽減していく

《子どもの成長によって母親のストレスが軽減していく》とは、子どもたちが成長し、少しずつ社会にとけ込んでいくことで母親のストレスも下がっていくことである。

i. 子どもたちが成長し、少しずつ社会にとけ込んでいっている

“子どもたちが成長し、少しずつ社会にとけ

込んでいっている”とは、不登校であった子どもが学校へ通いだして友達と遊べるようになって、少しずつ社会にとけ込んでいくということである。

「友達と遊べるようになったりとか、学校もたまに行けなくなるけど遅刻していけたりとか、少しずつ学校と社会に溶け込んでいく力、たくましさを子どもたちが成長という過程の中でつけていって (①)」

ii. 子どもの成長によって母親のストレスが下がっていている

“子どもの成長によって母親のストレスが下がっていている”とは、子どもたちの成長に伴って母親のストレスも軽減していくということである。

「お母さんは家にいて入院はしなくて下2人だけ預かってもらったりした時期もあった。(中略) ここ1年くらいはそういうピンチもない状況。(中略) そこにはお子さんの成長が大きく関わっている (②)」

3-10 はじめは上手くいかなかったが、チームとしてのACTが徐々にわかってくる

《はじめは上手くいかなかったが、チームとしてのACTが徐々にわかってくる》とは、母親にチームでの支援意義を理解してもらえなかったが、ACTへの理解が浸透していくということである。

i. チームで関わることの意義を本人にどのように理解してもらうか難しかった

“チームで関わることの意義を本人にどのように理解してもらうか難しかった”とは、母親にチーム支援の意義を理解してもらえなかった

ことである。その意義を母親に理解してもらわなければ、効果的な支援を継続することはできない。そこで、スタッフはそのことを母親に理解してもらうように努める。

「次のスタッフを投入させるまで私だけが関わる時間ができた。(中略) その間に本人が私との信頼関係ができていくのは良いんですけど、私だけで良いみたいな感じになりそうだった。(中略) こちらとしてのチームでやることの意義とか他のスタッフにも会ってもらって一緒に考えていった方が良いような内容もあるので、できればもう一人入ってもらってやりたい。(中略) どういう風に本人にそれを伝えていって入ってもらうかというところが難しかった (③)」

ii. それぞれのスタッフの役割を利用者にも理解してもらう

“それぞれのスタッフの役割を利用者にも理解してもらう”とは、スタッフの役割を母親に理解してもらうことである。スタッフの役割が母親に浸透していくことで、気軽に相談してスムーズな支援につながる。

「今後は役割分担を利用者さんとかお子さんに明確に分かっていただけるような工夫は今後は必要。(中略)。本人も理解してお子さんも理解して役割が浸透していけば困ったときとか気持ちが変わったとき… (④)」

3-11 関係性を構築することでスムーズな支援が行えるようになる

《関係性を構築することでスムーズな支援が行えるようになる》とは、母親とスタッフとの関係性の違いによって共有しづらいことがあるため、本人との関係性を作り、毎回の訪問で関

係性を意識して関わることで、支援がスムーズにできるようになることである。

- i. 関係性の違いによって話す内容の違いがあって共有しづらいことがある

“**関係性の違いによって話す内容の違いがあって共有しづらいことがある**”とは、母親とそれぞれのスタッフとの関係性に違いがあると、母親が話せる内容もスタッフによって違いが出るということである。

「症状のセルフコントロールについて話題を共有することは多少できるタイミングできる人というのがあって、関係性の違いから共有できづらいこととかもある
(①)」

- ii. まずは関係性づくりをする

“**まずは関係性づくりをする**”とは、支援開始頃は、まず母親との関係づくりを行うことである。

「最初の1年目のときは関係づくりなどでお話にいたりとか、本人が車が好きなので洗車を一緒にしたりとか (②)」

- iii. 毎回の訪問で関係性を意識する

“**毎回の訪問で関係性を意識する**”とは、毎回の訪問でスタッフと母親との関係性を構築し、関係性を維持することを意識的に行うことである。

「関係性は意識しておかないとつくるのは難しいけど壊れるのはあっという間に壊れるので安心せず、毎回の訪問でも関係性は考えながらしていかなばと (①)」

- iv. 声かけ・支援がでやすくなった

“**声かけ・支援がでやすくなった**”とは、母親との関係性を構築すると、スタッフの支援もスムーズになることである。

「ご本人さんとの関係性が深まった（中略）。気軽に相談してもらえたり助けを早めに発信してもらえる
(①)」

3-12 ACTチームの特徴を生かした支援を考える

《**ACTチームの特徴を生かした支援を考える**》とは、まず関係性に重きをおいた支援を行うが、その後はチームで情報を共有すること、状況に合わせて効果的なスタッフが関わること、またそれぞれのスタッフの役割を利用者に理解してもらうことで、チーム支援というACTの特徴を生かすということである。

- i. チームで共有する

“**チームで共有する**”とは、チームで情報等を共有していくことである。

「チームで取り組んで作戦をしてやっていけることなのかなと思う (③)」

- ii. 状況に合わせて効果的なスタッフが関わる

“**状況に合わせて効果的なスタッフが関わる**”とは、効果的だと思われるスタッフが関わることである。

「実際に子育て経験のあるスタッフが訪問にいらっしゃる (②)」

3-13 地域での生活を継続するためにACTが機能する

《地域での生活を継続するためにACTが機能する》とは、地域での生活を継続するために、スタッフがそれぞれ異なる方法で支援しながらチームで家族に関わり、母親の自己実現のために支援することである。

- i. それぞれのスタッフが異なる方法で支援しながら生活を支える

“それぞれのスタッフが異なる方法で支援しながら生活を支える”とは、目標は同じくしながらも、それぞれのスタッフは異なる方法で支援を行うことである。

「全体的にはお子さんが安定して生活できることを目標にする。(中略) 支援の方法はそれぞれが違うことをしながら生活を支えていく (①)」

- ii. 地域での生活ができています

“地域での生活ができています”とは、母親が地域で生活できているということである。

「多職種でなんとかその方が生活の継続ができていますという成果の一つ (①)」

- iii. 母親の自己実現を考えていく

“母親の自己実現を考えていく”とは、母親の自己実現を考え、生活の質の向上を目指していくことである。

「今後はタイミングをみなからお母さんの自己実現、貯金をして家族で使いたいというご希望もある。(中略) 仕事してお給料が発生すると生活してちょっと貯金ができる…生活の質の向上というところでも今後考

えていく (①)」

3-14 就労に向けてステップアップしていくことで、母親の生活能力が高まりACT卒業が見えてくる

《就労に向けてステップアップしていくことで、母親の生活能力が高まりACT卒業が見えてくる》とは、まず母親に就労の希望があり、就労に向かっていく目標を本人と確認し、日中作業所に通うなど段階を踏んでいくことで、次の目標が見えてくる。また、就労をすることや経済的問題の解決や人との関わりが持てることで、母親の生活能力が高まり、ACT卒業が見えてくるということである。

- i. 就労の希望がある

“就労の希望がある”とは、母親が就労をしたいという希望を持っていることである。

「働きたいなというご希望もある (①)」

- ii. まずは日中どこかに通い自信がついたら就労

“まずは日中どこかに通い自信がついたら就労”とは、母親が日中どこにも通っていないという状況から、次にデイケアや事業所などに通い、そこで自信がついたら就労を考えていくということである。

「とにかく日中どこかに通ってずっと体調が崩れないかみたいところを練習して自信がついたら就労で良いんじゃないか (中略) そういう意見をまとめて本人にどう思う? という感じ (③)」

- iii. 就労に向けて頑張っていくという目標が

明確になった

“就労に向けて頑張っていくという目標が明確になった”とは、母親とスタッフとの間で就労という目標が明確になっていることである。

「就労に向けてちゃんとやっていくんだよね、というところがこちらにも本人に提案する前に整理をして本人と相談ができています (③)」

iv. ビジョンを本人と確認する

“ビジョンを本人と確認する”とは、就労に向けてどのように進めていくか、スタッフと母親と一緒にビジョンを確認することである。

「A C Tと本人さんもそうだし、できればご両親とか先生も含めてこの人の目標である仕事に向けてどうやったら仕事できるかっていうのを一緒に考えていてゆくゆくはちゃんと仕事復帰ができるようにみんな考えていけたらなというのが一番のビジョン (③)」

v. 少しずつ次の目標が見えてきた

“少しずつ次の目標が見えてきた”とは、就労へ向けての支援をステップアップすることで、少しずつ次の目標が見えてきたということである。

「退院して、もう入院したくないというのが最初の希望だったんですけど、その目標から今状況が変わってきて退院したくないというのはもちろん、仕事復帰したい、やっぱりできれば再婚がしたいとか目標がもうちょっと上に見えてきた (③)」

vi. 就労の延長に経済的問題の解決がある

“就労の延長に経済的問題の解決がある”とは、母親が就労をすることで経済的問題も解決

していくことである。

「仕事復帰をする延長で本人の中での経済的な問題を解決していくのかなと思っている。(中略) 早く保護を受けなくて良いような収入が得られるようにということでの仕事の復帰 (③)」

vii. 就労することで人との関わりが持てる

“就労することで人との関わりが持てる”とは、母親が就労することで新しく人との関わりを持ち、孤立の解消につながるということである。

「今後は家庭とか学校行事とかでの接点、お母さんの楽しみであったり、就労という話で動きが出てくると孤立という話も新しい集団の中に入っていくという意味だと、孤立という課題も解消とまではいかなくても、人との新しい接点は持てるかなと考えている (①)」

viii. 就労へと進んだときにA C Tを卒業と考えている

“就労へと進んだときにA C Tを卒業と考えている”とは、母親の就労が実現したときにA C Tからの支援の卒業を考えることである。

「就労の方へと進んでいったときに木柵としての支援は終了 (①)」

4 考察

分析結果から、A C Tは主に次の2点を実践していることが明らかになった。

一つ目は、A C Tが母親のストレスの軽減、経済的問題の解決、孤立の解消などの支援を行

うことによって虐待防止につながっていることである。二つ目は、これらのチーム支援にACTの特徴が生かされているということである。これらから、メンタルヘルス問題のある母親の支援にACTは有効であることがわかった。

まず虐待防止につなげる母親のストレス軽減へ向けた支援は、『母親のストレスを軽減するための支援をする』『母親が精神的に不安にならないよう経済的問題を軽減する』『母親が他者を頼り、負担軽減できるようになる』『母親が症状のセルフコントロールできるようにする』『孤立を解消するために働きかける』『子どもの成長によって母親のストレスが軽減していく』という6つのカテゴリーから説明できる。母親のストレスの原因は様々であり、多方面での母親の負担を軽減させるために多職種チームが有効に機能していることがわかった。

しかし、『母親自身の生活歴が子育てに影響を及ぼしている』ことは明らかになったが、母親の子育てスキル向上のための支援については明確に提示することはできなかった。また、子どもへの支援についても十分に検討できなかった。

次にACTによるチーム支援についてである。『ACTチームの特徴を生かした支援を考える』と『はじめは上手いかなかったが、チームとしてのACTが徐々にわかってくる』によって説明できる。三品（2013：189）によると、ACTの「チームは、チーム立ち上げ当初にスタッフ間でチームの‘目標の共有化’や‘理念の確認’スキルを使い、合意形成スキルを駆使する」とある。本研究でも、チーム支援によってメンタルヘルス問題を有する母親への支援をACTが行っていた。

ACTチームの持つスキルについても「ス

タッフは、さまざまな生活上の困難を抱える利用者に職域を超えてサービスを提供する即応性に富んだ超職種チームスキルを駆使し、超職種アプローチ、合意形成、しなやかなチームづくりの3つのスキルを交互作用させ、時には同時並行的に用いながら、変幻自在スキルを生み出していく」としている（三品 2013：189）。ここでの変幻自在スキルとは、「多職種で状況に応じて利用者にサービス提供をおこなうスキルによって、スタッフの入れ替わりがあっても即応性に富んだ超職種チームスキルを発揮できるようにするもの」である。これは“状況に合わせて効果的なスタッフが関わる”と重なる部分があるが、あらゆる局面で職域を超えて働くという「超職種チームスキル」について深めることができなかった。

5 本研究の限界と今後の課題

本研究は、メンタルヘルス問題のある母親への支援を行っているスタッフ3名へのインタビューから得られたデータにもとづいたものである。その意味でこの支援について一般性・普遍性を有しているわけではない。また、インタビューで得られた事例はすべて母親の症状が安定してきており、本人が就労を希望しているものであった。したがって、就労を望まない等の母親への支援は検討できていない。これが本研究の限界でもある。

今後は、母親だけでなくACTチームのおこなう子育て支援にも幅を広げ、ACTによるメンタルヘルス問題のある親と子育て支援の全体像を明らかにすることなどの研究を行うと同時に、さらなるデータ収集をおこなってより普遍化を目指す研究をおこなっていく必要がある。

A C Tによる訪問型支援は有効に機能している。しかしA C Tの活動はまだ一般的ではない。したがって今後はA C Tに関する知識や技術の普及、そのための研修会の開催等を通してA C Tの情報を広げていくことなど、A C Tがより活動しやすくなるための基盤を整備していくことがますます求められる。

本論文の一部は、2017年度福岡県立大学人間社会学部社会福祉学科に提出された白石裕香の卒業論文をベースに、白石と住友が共同して修正・加筆を行ったものである。

注

- 1) 3名の研究協力者には、研究計画書等について説明した上で調査協力の同意を得ると同時に、事例本人からも同意を得て、インタビュー調査を実施した。また、本稿への掲載についても同様の同意を得た。
- 2) うえの式質的分析法とは、「川喜田二郎さんが発案したK J法をうえの式に改訂」（上野 2018：151）もので、「K J法は経験的な根拠にもとづいて、たしかなアウトプットを出すことのできる大変実践的なデータ分析の手法」（上野 2018：153）であることがこの分析法を採用した理由である。本研究では、うえの式質的分析法のうち、rawデータからユニットとカテゴリーを作成し、ストーリーラインを示した。

文献

- 松宮透高・井上信次（2010）「児童虐待と親のメンタルヘルス問題—児童福祉施設への量的調査にみるその実態と支援課題—」『厚生の指標』57（10）、6-12。
- 松宮透高（2013）「精神保健福祉課題としての子ども虐待—メンタルヘルス問題のある 親への支援拡充に

向けて—」『社会福祉研究』117、2-8。

- 松宮透高（2016）「子ども虐待防止に活かすべき精神保健福祉士の機能とその課題—メンタルヘルス問題のある親への生活・子育て支援を考える—」『精神保健福祉』47（2）、96-99。
- 三品桂子（2013）『重い精神障害のある人への包括型地域生活支援—アウトリーチ活動の理念とスキル—』学術出版会。
- 上野千鶴子（2018）『情報生産者になる』ちくま新書。
- 吉田敬子・長尾圭造（2008）「養育者に精神疾患がみられる場合の虐待事例への支援—支援スタッフに潜む問題と周産期からの予防—」『子どもの虐待とネグレクト』10（1）、83-91。

